尺骨借景

ラビアレ和パラレル冬模様サ●エ式家屋ここは昔の日本
※本来はアンソロに収録予定だった原稿のリテイクです

（その方は、大層お綺麗な眼を持っていらっしゃいました）

◇

死ぬかどうか、はっきりとみえた訳ではなかった。ただもしかしたらここで死んでしまうかもしれない、と思った。

僅かな隙間から目に映り込んだのは、昨夜熱心に吹雪いたおかげの雪ばかりだった。けれどそれは今まで見たことのない景色でもあった。ひとつの違和感に視線が留まる。いつもの風景である筈のそこは、いつもの風景ではない。そこには少しだけの付加があった。

あれは、ひと、だろうか。

オレは引き戸を自分の身体の幅の分だけ開け、縁側のへりに腰かけた。本当は外へ出て行こうと、その違和感の訳に近づこうと思ったのだけれど、履きものが雪に埋もれてかどこにも見当たらなかったのでそれは叶わなかった。

寒さに身震いして無意識に羽織の袖に手を突っ込む。座り込んだ床からは布を隔てて、冷えた感触がじわじわと伝わってきた。

「――お前は、誰だ？」

生きているのかと、つづいてそう問いかけそうになってしまう程、底なしの白さに埋もれている眼前の子供は、酷く透明だった。そう、透明、だった。

勿論その子供の身体が透けて見えるということでもなく、

ただ単にうまい言葉が見つからなかっただけでもあるのだけれど、たとえて言うのならば、それが一番しっくりきたのだ。

濁りがなく、髪も肌も瞳ですらも白く、それは泡沫のような風貌をして庭に立っていた。ただのひとりきりで。あまりにも不可思議だった。まだ夜も明けて間もない頃合いに、我が家の庭の奥に子供がたったひとりで、しかも薄い単衣一枚で、どこか遠くを眺めているようにそこに立ち竦んでいた。

「お前は、誰だ？」

オレはもう一度、同じように口を開いた。オレの声を耳にして、ゆっくりとその端正な横顔がこちらを向く。

「――おなかが減って、どうしようもありません」

子供はこう言った。鈴の音というのはこのような声を言い表すものかと、暢気にもオレの頭は考えた。

「……おなか、」お前の腹の状態は訊いていない、とは言えずに聞き流す。「名前くらい、あるだろ」

「あんまり眠くて、うとうとしていたら、いつの間にか冬になっていたんですね」

話が噛み合わないことには別段怒りは湧いてこないけれど、なんだか気が抜けてしまった(それが子供の計算どおりだったのかは、今でもわからない)。言っていることの意味はわからなかったものの、子供が纏う気怠げな空気にすっかり不信感も薄まってしまい、オレは子供をこちらへ呼び寄せた。――それが身の災いを招く行為だとも気づかずに。

「腹が減ってるなら、なんか喰わせてやるさ、」

それはただの親切心に相違なかった。だって十五にも満たないような子供が、何故こんなところに雪を被ったまま突っ立っているのか、まるで見当もつかなかったのだ。

「……本当？」

本当、と。

子供が言うから。

「本当さ、ほら、こっちこいよ」

オレはこっちへこいよ、と。

更に自身の近くへと。

「外は寒いだろ？　しかも、そんな薄着で」

繰り返すけれど、それは本当に、ただの親切心からだった。何かあたたかいものでも喰わせてあげようという、オレにしては珍しく十割の思いやりだった(けれど珍しいことをするものではない、とオレは後々後悔することになる)。

「うれしい、」

子供は駆け足でこちらまできた。それはよかった。

よくよく見ると子供は生足のままで、随分前からそうしていたのだろう、爪先からずっと上まで真っ赤になって、見るからに冷たそうだった。

「あなた、いい人」

にこにこ屈託なく笑って、子供はオレの肩に両手を置いた。その手も酷くひんやりとしていた。人間の手はこれ程冷たくなるものなのかと、間抜けにも愕然としたくらいだった。

「ほら、早く中に入れ、」

にこにこ笑って、子供はしゃきんと、何かそんな効果音までつきそうな動きを見せた。端的に言うと、左手の爪を伸ばしたのだ。左手の、赤黒い爪を、長く伸ばしたのだ(遠目からだったから気づかなかったのか、それとも子供が着物の袖で覆っていたのか、)。

死ぬかもしれない、と、思った。――あれ、もしかしてオ

レってここで死ぬのかも？　なんて風に。
それこそ直感的に。
もしかするともしかしなくとも、オレと子供の間では齟齬が生じていたのかもしれなかった。子供にしてみれば、喰わしてやるといったものが、
「いただきまあす」
あんぐりと喜びに先走って開いた赤い口、白い歯、赤い舌。
同時に長く赤黒い爪が迫ったかと思えばぶつりと形容するのでさえ嫌な音がして、――刹那右眼の色が消え失せた。
消えた。
雪景色も、子供の銀色の虹彩も、何もかも、右眼から。
「――――――！」
あまりの激痛に声も出なかった。痛いという言葉だけでは十分に表現できないくらいの、それはもう、痛みだった。
眼前では信じられない光景ばかりが広がっていて、オレはそれを直視するのも耐えられずに俯いた。反射的に押さえた右手の下では眼球を失った目蓋を懸命にきつく閉じてみたのだけれど、痛みは少しも遠のかないし軽くもならなかった。
それでも嫌になるのは、まだ残っているオレの両耳が、努めて音を拾おうとしていることだった。
見ずともわかる、子供は明らかに、オレの右眼を喰らっている。
「お前……っ」
子供はやはり、顔は窺えなかったけれども、にこにことうれしそうに笑んでいるのだろう。
「あなたの眼は、とってもおいしいです」
ごくん、とオレにも聞こえる程に喉を鳴らし、芝居がかった口調で、それでも子供に自覚はないのだろう、芝居がかった台詞を吐いた。
「……、そうかよ、それは、よかったな、」
何がいいものか。
「お前の主食は、米なんかじゃないって、先に、言っとけっつの……」
オレはきっと右眼と言わず左眼も、左眼と言わずそこら中を、この見た目だけは儚い子供に喰い散らかされるのだろうと思い、覚悟を決めて向き直った。けれど子供の唇の端々からはオレのものだろうと思われる血液がだらだらと滴っていて、痛みとはまた別に、思いきり顔を顰めてしまった。
「……まだ、だ、って言うんなら、……これ以上痛いのは、勘弁してくれさ、」
「まだ？」子供は不思議そうに首を捻った。「もういらないよ？　何も。あとは、まずそうだもん。右眼は格別綺麗だったから、前々から、おいしそうだなあって見てたんです」
本当に、おいしかったから、もう満足。
ほう、と憂鬱そうではない溜息をひとつ吐いて、どこか恍惚とした表情を浮かべ、子供は――子供のなりをした立派なばけものはその場に座り込んだ。その身体に、体温というものはない。肌が触れてもそこは少しも溶けようとしなかった。
「……きれい、？」
子供はもうオレのことなど眼中にないらしく、地べたに手をついて、雪を食べ出した。犬のように直接口で拾って食べはじめたのだった。
オレはもう訳がわからなくなってしまって、けれどもこれらがすべて嘘だと思い込もうにも、真っ白い雪にちらちら輝

く赤は、どうにもこうにも、威力が強すぎた。

◇

（その方の眼は想像していたとおり、とても透きとおった味をしていらっしゃったのでした）

You asked for it.